

ウサギが快適に感じる温度は？

どんな動物でも温度や湿度の急激な変化は苦手です。特にウサギはデリケートで影響を受けやすい動物です。

夏毛と冬毛にはえ変わりますが、人間と違って1年中毛皮のコートを着ています。暑さや寒さに合わせて服を脱いだり着たりできませんし、エアコンのON、OFFも温度の設定もできません。飼い主がたよりですので、なるべく快適な生活ができるよう、工夫してあげましょう。

ウサギにとっての快適温度の許容範囲は18～28 くらいですが、もっとも快適な温度は20～22 を中心に激しい変化がないことといわれています。ちなみに平均湿度は40～60%の間に保つといいでしょう。

ウサギは暑さにくらべると寒さに強いようです。とはいっても、冬は温度管理ができる室内で過ごすほうが無難です。

屋外で飼う場合は換気に気をつけ、すきま風や寒さを防ぐためにシートや板を設置します。小屋の中には牧草などの巣材を厚めに敷いて、保温の手助けをしてあげましょう。

昼夜の気温差や、暖房をつけたり消したりで温度差が大きくなると換毛や病気になることはありませんか？

家庭で飼われているウサギは、1年に約4回換毛し、季節により夏毛や冬毛に変化します。換毛は気温や日照時間の変化と関係していると考えられています。

気温・換気・温度・床敷き・騒音・排泄物の蓄積など、多くの環境的要因により病気にかかりやすくなります。なかでも急激な気温の変化は、病気の大きな要因となります。

ケージの置き場所は、昼夜の寒暖の差が大きくなるような窓際は避けましょう。

ペットヒーターや保温ライトなどで暖める場合は、ケージの半分だけにするなど、全体を暖めないようにしましょう。暑すぎると感じた時に、逃げ場がなくなるからです。

床の面積が小さいケージの場合は、ペットボトルにお湯を入れてタオルでくるんだミニ湯たんぽを備えたり、ヒーターをケージの側面に少し離して立てかけるなど、工夫しましょう。

換毛の時期は、特にまめにブラッシングをしてあげることも必要です。

冬に温度差が大きくならないように飼い主が注意しなければいけないこと

ウサギは、暑さにくらべると寒さに強い動物ですが、急激な温度変化には注意が必要です。

室内で飼っていたウサギを、急に屋外に出して飼ったりしないようにしましょう。

屋外で飼う場合は、すきま風が当たらないようにし、気温が4以下にならないように気をつけなければいけません。子ウサギ、高齢のウサギ、病気のウサギは温度の変化に適応する力が弱いので、とりわけ注意が必要です。

昼間留守にしたり、夜寝る時に暖房を切ったあと、温度差が大きくなり過ぎないように、エアコンの温度設定には気を配りましょう。ペットヒーターを使う時は表面の温度が高くないものを選ぶか、ヒーターにキルティングなどの布を被せ、低温やけどを防ぐ工夫をします。また、コードなどをかじらないようにカバーをつけましょう。

寒さや暑さの気温の変化に対して、動物自身が適応する力を持っているので、過度に神経質になる必要はないと思われますが、なかには急な変化についていけずに病気になってしまうこともあります。食欲、元気がないなど、状態がいつもと違うと感じた時は、早めに動物病院に相談しましょう。

エアコンの温度設定で気をつけること

ここで、よくあるエアコンの温度設定の間違いについて一言。

エアコンの設定温度は、必ずしも室温でないことがあります。特に調量を弱めに設定したときには、室温との差が大きく開くことがあります。

手術を順調に終えて退院したウサギの飼い主さんから、「ミミがけいれんするようにガタガタふるえていて、具合が悪そうなんです」という緊急の電話が入ったことがありました。帰る時はふるえていなかったのに「お部屋の温度は何度ですか」と聞くと、「エアコンを25に設定しています」との返事。「温度計では何度になっていますか」と再確認すると「えーと、あっ15です！」

このように、設定温度=室温になっていないこともありますので、設定しただけで安心せず、室温が上がることまで確かめましょう。

15分後、ミミちゃんは暖かい部屋でふるえも止まり、飼い主さんも「先生に心配かけちゃって。でも電話してよかったです。ありがとうございました」。こちらも一安心しました。

ついでに記しますと、夏によくあることですが、「うちは除湿にして寒くならないようにしていますので、冷え過ぎることはありません」という飼い主さん。これも、冷房より寒くなってしまうことがあるのです。除湿は齡風量で空気を冷やしながら水分を除去する仕組みのものが多く、床付近に冷たい空気がたまりやすく、要注意なのです。

暖かい空気は上に、冷たい空気は下にいくので、ウサギのいる場穂によっては思ったほど暖かくなかったり、逆に寒かったりします。必ず動物の居住空間に温度計を設置して温度を計り、モニターするようにしましょう。

コラム

週休二日制その後の現状

朝から大雨。今日はもんびり。久しぶりに書類の山（新しい薬のパンフレット・フードの価格表・学会発表の案内書 etc.....片づけても片づけても、日々押し寄せう情報の山です）に手をつけていたら--その夜、学校飼育に熱心な N 先生からショッキングなメールが入りました。

タイトルは、「何故、学校は動物飼育を重視しないか」---完全週休二日制が始まったこの春から夏にかけて、多くの小学校で動物が死に絶えました。

世話が行き届かず体調を崩したウサギは下痢をします。健康なら自分の体をなめてきれりにしますが、そんな元気もなく、下痢便は体についたまま。そこへ八エが卵を産みつけ、生まれたウジがウサギの体の中を食べていきます。学校は動物が死に絶えたのをチャンスとして、飼育をやめる傾向があります。

S 県では 18 校飼育していたのに、7 月に入り、これから先も飼育する予定がありません---メールを読んでびっくり。

これによると、欧米では、発達心理学による研究が進んでいて、子どもを育てるときには、自然教育と動物教育が重視されているそうです。そして、動物飼育の意義について、次のように考え、

動物介在教育が提唱されているそうです。

命の大切さを学ばせることで、生命尊重と死の準備教育。愛する心を育てることで、情愛教育と人の土台づくり。動物を思いやる心を養うことで、共感・感受性・協力・責任感が生まれる。動物に興味を覚えることで、知識欲の刺激・観察力・洞察力・科学への入り口、生物への理解を深める、生きる力を養うことで、ハプニングへの対応・工夫・判断力・決断力・冷静な視点を育てる。緊張をほぐすことで、癒し、人間関係の改善、コミュニケーションにつながり、ストレスが緩和される。

以上のことから、子殺しや幼児虐待のニュースが耐えない今、学校動物の役割が重要視されています。

ところが日本では、「飼育は墓掘り」と、死んだ動物を数えている現実がある、ということです。

学校の飼育動物を支える学校獣医師制度と、日々の診療と、心にかかることが山積みで、1 日 24 時間、あっという間に翌日になっていました。